

氏 名	金 慧 栄 (キム ヘヨン)		
学 位 の 種 類	博 士 (芸術)		
学 位 記 番 号	甲第5号		
学 位 授 与 日	平成17年3月23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論 文 題 目	現代ガラスアートにおける原始模様の新たな適用形態に関する研究 — 渦巻文様を中心に—		
審 査 委 員	主査 教 授	佐 藤 晃 一	
	副査 名誉教授	辻 惟 雄	
	副査 教 授	島 尾 新	
	副査 教 授	伊 藤 孚	

内 容 の 要 旨

ガラス芸術は美術の変化にともなって、多様な現象を見せている。一般的には、ガラスは「工芸」である、という概念がまずあって、実際にも多くのガラス作品が工芸的なイメージで作られており、人々に「ガラス工芸」という単語をごく自然なものと感じさせている。

しかし、ガラス芸術の世界は徐々に動いている。それは、工芸という範囲を越えて、多彩な美術の世界へ入り込みつつある。このような時代的な現象の中で、筆者もガラス芸術を、美術のひとつのジャンルとして位置付けたいと考えている。本研究も、「工芸」のイメージから離れて、インスタレーション(Installation)としてのガラス作品を創出することを目的としている。

モチーフとしては、渦巻文様を作品に取り込むことにした。ガラス芸術では、表現媒体として、幾何学文様が多く用いられている。そのなかでも数多いものに渦巻がある。

ガラスを成形する最も基本的な技法は吹きガラス(Blowing)であり、このテクニックによって様々な形が作られるが、そのなかで遠心力を用いて出来上がる模様が渦巻である。このテクニックで出来る渦巻模様は、吹きガラスの魅力の一つとして、長い間ガラスに関係する人々に愛されてきた。

この研究制作では、この渦巻文様をガラスの中から持ち出して、新たなフォルムで表現したくなり、渦巻をモチーフとして実験的なインスタレーション(Installation)の作品を創作することにした。

従って、新たな渦巻のフォルムをガラスで提案する。その目的は、単純な文様の意味を超えて、人間の精神・思想を現代的な感覚で、かつ持っている特性に合わせて視覚化する道を探ることである。それを通じて、現代美術の造形分野としてのガラスを位置付けてみたい。

本論文では、まず、世界各地の渦巻を概観しながら、その概念とシンボリズムを考察する。次に、渦巻の造形性を探求し、それを現代のガラス造形にいかに関結づけられるかを考察するために、理論的な研究と、渦巻をモチーフとして用いた現代美術およびガラス作品の事例研究を進めていく。最後に、ガラス芸術の可能性を論じて結論とする。なお、本研究は制作を主とし、論文を副として成り立っている。本論文は、作品制作をより深めるための前提として位置付けられる。具体的な内容は、以下のよう

「序論」

この研究をはじめた動機の背景と目的、そして、本論文における研究方法を述べる。

「第1章 渦巻の概要」

渦巻のシンボリズムに関する世界各民族の創世神話を探り、渦巻文様の起源を中心に、現存する遺跡などを概観する。次に、古代から人類が共有している渦巻文様の原形性に対して論じる。そのなかで、宇宙の現象と自然発生的現象に対する述べる。また東洋的な精神思想体系の特性を考察する。

「第2章 渦巻の造形性」

幾何学的文様としての渦巻の特徴、また審美的特徴について理論的考察を行い、また事例分析を基礎として、渦巻の造形性を分析する。

次に、造形としての渦巻を形態と造形性の差異をもとにして、平面と立体という二つの観点から、現代美術作品の中での渦巻の特徴と造形性を論じる。

「結論 ガラスにおける渦巻の芸術的可能性」

結論として、ガラスの現在、ガラスの世界の問題点、インスタレーションとしてのガラス、ガラスによる渦巻の可能性について論じる。そしてガラスという素材の提供する特性が、実験的なインスタレーションに新たな表現を与え、それがガラス芸術の世界に可能性を創出することを通じて、自然の親人間的な理解と文化的異質感の克服を期待する。

「研究作品解説」

理論的論文研究を基礎とした成果の一部として、現代ガラス芸術の可能性と新たな

方向性を作品の写真で提示し解説を付す。